

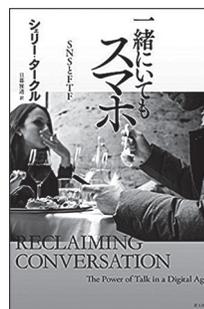
書評 01

著 シェリー・タークル 訳日暮雅通

『一緒にいてもスマホ —SNS と FTF—』

青土社 / 2017 年 2 月刊 / 515 ページ / 2400 円 + 税
ISBN 978-4-7917-6969-8

評者：元橋 利恵
大阪大学大学院人間科学研究科



先日、10 年以上付き合いがある気心知れた友人らと久しぶりに集まった。このような時、テーブルの上には各人のスマートフォンが置かれており、会話に参加しつつも LINE の新着情報が画面に表示されるたびに視線を落としてチェックをするのは当たり前前の光景になっている。それだけでなく、最近関心のあるニュースの紹介や近況報告にもスマートフォンは必要なツールとなっている。その会合では、そのうちいつも衝突する 2 人が政治的テーマについて相対する立場から議論を始めた。その時私は無意識にスマートフォンを開き、その場で LINE や SNS のチェックをし始めた。本当はスマートフォンのチェックなど必要ないし緊急の連絡が来るような状況でもない。私はほぼ無意識にスマートフォンをいじることでその場の複雑でちょっと面倒な会話から離脱していたのである。

このような光景はごくごくありふれたものではないだろうか。会議や大学のゼミや授業にデバイスを持ち込むことはタブーではなくなった。会議にも参加しつつ、スマートフォンに目を落としメールのチェックをする、しばらくするとまた、スッと会議の話題に戻り発言をする。退屈な話題が続くと判断した場合には溜っていたメールの返信に取り掛かる…。

本書の目的は、このようなスマートフォンや SNS からもはや片時も離れることがなくなった私たちの在り方が人間関係にもたらす影響について警鐘を鳴らし、私たちに会話すること、つ

まりフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションの価値を再認識するように呼び掛けることである。そして目指すのは、私たちがテクノロジーの力を理解した上で使いこなし、会話を豊かにする方向に活かすこと、消費者や技術者がそのことに自覚的になることである。

テレビゲームや携帯電話など、新しいテクノロジーについて、本来の人間らしさを損ねると警鐘を鳴らす議論は多い。まさにテレビゲームをし、携帯電話を使いこなして育ってきた世代である評者にとってそのような議論は少々説教臭く感じるのも正直なところである。しかし、本書はそのような「若者や子どもに対するよくある説教」というわけではない。本書が視野にいられているのは老若男女全ての人々がテクノロジーの魅力にとりつかれてしまっているという状況である。本書はあらゆる世代の人々へのインタビューをもとに構成されているが、取り扱っている事例からは、むしろ高校生や大学生は常にオンラインで「つながっている」ことに疲れており、別の人付き合いの在り方を求めている人も少なくないこともわかる。

著者である心理学者のシェリー・タークルは TED (Technology Entertainment Design 非営利で毎年開催される大規模な世界的講演) でのパフォーマンスでも知られている。2012 年の TED 「つながっていても孤独？」 (https://www.ted.com/talks/sherry_turkle_alone_together?language=ja) のなかで彼女は、1996

年当時はむしろ新たなテクノロジーの登場に非常に期待し絶賛していたと述べている。しかしその後、私たちの人間関係や精神生活はそれほど良いものになったといえるだろうか。彼女は、私たちはむしろフェイス・トゥ・フェイスの会話をする力がなくなってしまい、難しい話や自分の頭で考えることを避けるようになってしまったと強調する。

本書では、会話を取り戻すための議論の指針として、思索家として知られるヘンリー・デイヴィッド・ソローの言葉、「三つの椅子—ひとつ目は孤独のため、二つ目は友情のための、三つ目は社交のための椅子」を引用している。ソローは池のほとりに丸太小屋を建てて住んだ「隠遁者」として知られているが、タークルに言わせれば、この三つの椅子こそが私たちが会話（おしゃべり）に向かわせるためのポイントを示すものなのである。すなわち、三つの椅子が象徴するのは内省、共感、指導（メンターシップ）である。しかし、テクノロジーはこの3つの価値の循環を断ち切ってしまう。

孤立することを恐れるあまり、孤独になる方法を私たちは失ってしまっている。昼休みに一息つくとき、電車移動中、スマートフォンの世界に没頭することは決して孤独になっていることではない。だが、人が何かを創造するとき、自分の言葉を生み出す時、孤独になる必要がある。大人は、ひとりぼっちになって自分と向き合うことやその方法を子どもたちにもっと教えないといけない。

本書で引用されている著者がインタビューしたある大学生の発言がある。対面でのコミュニケーションはリスクであるというのだ。リアルタイムだとへんなことを口走ってしまうかもしれないが、メールであれば事前に編集することができる。友人に内容をチェックしてもらうこともできる。メールでのやりとりは「完璧な」コミュニケーションが可能である。私たちは、一言目と目を合わせて話すよりも「あとでメー

ルを送ればいいのか」という方向に流れてしまいがちである。だが、タークルは会話においては、非言語的意味のほうが重要であると述べる。「相手に自分のことをいちばんよくわかってもらえるのは、ためらったり口ごもったり、黙り込んだりするときではないだろうか。自分で自分のことがよくわかるのも、そういうときだ。」(p.35)

著者が最も深刻であると捉えているのは、会話ができなくなることによって私たちが相手をおもいやるということをだんだんとやめてしまうことである。しかし、共感能力は失われたのではなく、単に訓練の問題である。そのため、本書では、大人や組織のリーダーに求められることとして、共感する能力を引き出すような、会話のためのデザインやルール作りが提案され、すでに先進的な企業で取り入れられている取り組みが紹介されている。会議へのデバイス持ち込み禁止のルールを設定したり、カフェミーティングを積極的に設定するなど対面のおしゃべりの機会を増やすことは、職場の生産性の向上に繋がっているという。この視点は今後ますます注目されていくだろうが、今会議のペーパーレス化が進む中、デバイスを持ち込むことなしに効率的に会議を進めていくことには工夫が必要であろう。しかし、そもそも会話や共感の価値を見直すという議論は、効率的であることが最も重要であるとみなされること、「有能」で価値がある人間と思われるためにはいつでもオンラインで要求に答えられる常時“オン”でなくてはならない、といった社会の前提となっている価値観を大転換しようということでもある。人と人との関係はメールでの「完璧な」コミュニケーションでは追いつくことができない。現在起きている、私たちの脆弱性に対するテクノロジーの意図せざる結果を受け止め、テクノロジーをコントロールするような知恵やルールが求められている。